

前回までのあらすじ

流遠るとおやみひめは、小学六年生の普通の女の子。学校があつて、友達がいて、好きな男の子がいる。

しかし、そんな平穏な生活は、とある少女との出会いで一変してしまふ。

少女の名はツバキ・タカチホ。

彼女は地球とは別の星・惑星ゼヘナから来たという。

ツバキの目的は〈カタストロ〉と呼称される敵性体の殲滅せんめつであり、彼女はそのための存在——〈機獣少女きじゅう〉だった。

〈カタストロ〉を殲滅せんめつし、ツバキは故郷の惑星ゼヘナに帰り、やみひめは以前のように普通の生活に戻れると思つていた。

しかし世界は改変され、やみひめと橘アサトたちばな、そして友人のクラウ・P・ブランはゼヘナに転移してしまふ。彼等はゼヘナを危機に陥おとしれている別の敵性体——〈ブレケース〉の存在を知り、その打倒に協力する事となった。

復活した古代種と呼ばれる機獣——〈ステインガー〉を殲滅すべく発動された〈ヒナミ総力戦〉。やみひめとツバキは〈ステインガー〉を打倒し、その骸むくろから出現した謎の少女の無力化に成功する。

一方、〈ステインガー〉の幼体群を食い止める各別動隊の戦いは続いていた。参加メンバーの中では実力おとに劣るリツとモカも善戦し、他の別動隊の合流によって生き延びる事が出来たと思つた矢先に、謎の物体が飛来する。それは行方不明となつていた〈機獣少女〉、キリエ・ソウマが放つたものだった。その攻撃で周囲は荒れ果て、リツは戦闘不能。姿を現したキリエ本人によつて、モカも瀕死の重傷を負わされてしまふ。

遅れて駆け付けたカナコはモカを救い、キリエに対して静かに怒りを燃やすのだった。

※登場人物紹介は[こちら](#)

機獣少女ゾイカルやみひめ *The NOVEL REVIVAL*

『剣』という分類カテゴリにおいて、カタナは特殊だ。

一般的に剣とは『斬る』ための武器だが、その多くは実際には『対象の切断面を叩き潰している』のに対し、カタナは文字通りに『切断』する。惑星・地球の『ニホン』を発祥とするカタナの刃はは鋭すまじく、力を加えずとも、すっと引くだけで対象を切断でき出来てしまう。故ゆえにその扱あつかいは、他の剣術とは明らかに異なる。

「——ッ！」

高速で振られるカタナの一閃。機力によって強化された身体能力と、高い技量によって繰り出される剣技は、一種の芸術アートにまで昇華されている。

カタナを使った剣術の特徴——それは『速さ』だ。

一般的な剣と違い、切れ味に優れたカタナを振るうのに筋力は重要ではない。的確な角度を見極め、速さと鋭さを以て斬る。それは自身が得物えものと一体化する事に近い。

カタナを振り下ろし、右に払い、そのまま大きく円を描き真一文字。無駄のない連撃は『舞い』のようであり、彼女の袴姿はかまから『神楽』を思い浮かべる者もいるかもしれない。

カナコ・T・シングウジは戦っていた。

長い黒髪をなびかせ、希少金属『リーオ』を使って鍛えたカタナを振るい、異形と化した機獣少女を止めるために。

「きひっ……くははは……っ！」

もはや言葉とは呼べない奇声を上げ、カナコと相対する異形の機獣少女——キリエ・ソウマ。

背中には赤く輝く刃やいばのような羽根。額ひたいから後方に向けて伸びる、鶏冠とさかを思わせるプレート。板状の突起。肩甲骨の辺りから生えている一对の副腕さそりは、鋏ハサミを思わせる。腰の下からは平たく大きな多関節の尻尾しっぽが生え、先端には砲身パレルのような部位が確認出来る。

無論、これはキリエ本来のMBジャケットではない。原形を留めている部分についても、白銀を基調としていたカラーリングは青と赤に変わっていた。その形状と色は本作戦の殲滅対象せんめつであり、今この世界を脅かしている元凶である〈ステインガー〉を彷彿ほうふつとさせる。

キリエは五日前、不慮アクシデントの出来事により行方不明となった。これは封印されていた〈ステインガー〉が姿を現したタイミングと合致する。

（あなたに何があったかは知らないけど——）

カナコの斬撃の速さが上がっていく。キリエは二本の副腕と、本来の右手で握る長大な馬上槍ランスを駆使してそれを捌くが、少しずつ、だが確実に追い込まれつつあった。

（あなたのやった事は許されない）

無残な姿になっていたリツとモカの光景が、カナコの脳裏を過る。あの二人の事は、今回の作戦に参加するまで知らなかった。ひよっとしたら顔を合わせる機会があったかもしれないが、基本的に他人に無関心なカナコは憶えていない。〈ブ레이크ス〉襲来直後に助けた二人だとツバキには言われたが、そんな事もあったかもしれない程度の認識でしかない。

そんなカナコでも、この危険な作戦に参加してくれた勇者にまで無関心ではいられない。資料を見る限り、彼女等の実力では荷が重いと感じ、参加させるべきではないとも考えたが、状況がそうさせてくれなかった。戦力がギリギリ足らず、作戦そのものを断念せざるを得なかったのだ。

賭けではあったが、結果、リツとモカは想定以上の仕事をしてくれたのだろう。二人の状態を見れば、〈ステインガー〉の幼体群にやられた訳でないのは一目瞭然だった。もっと早く駆け付けていれば、二人を救えたかもしれない。キリエに罪を重ねさせる事もなかったかもしれない。

(だから……!)

だから、この怒りはキリエだけに向けるべき感情ではない。向けるべきは自分自身と、この作戦に参加しなかった臆病者達と、〈ステインガー〉に対し静観しているも同然の中央政府、そして元凶である〈ステインガー〉――

元凶？

本当にそうか？

(え……?)

そもそも元凶とは何だ？

一連の事件の発端は〈ブ레이크ス〉だが、それは〈ジエネレーター〉に組み込まれたMBコア――つまり機獣によって呼び出された。〈ジエネレーター〉に組み込まれた事で、自壊のためのプログラムである『アポトーシス』を失ったMBコアの、『終わらせてほしい』という『希望』が〈カタストロ〉を呼び、それが『絶望』へと変化した事で〈ブ레이크ス〉が現れたのだ。己の意思で自らを終わらせる権利を奪われ、ただただ〈ジエネレーター〉の部品として生かされ続ける機獣は被害者ではないか？ そして〈ステインガー〉もまた古代種と呼ばれる機獣。この現状は、すべて人間の自業自得ではないのか？

(私達、何と戦っているの……?)

戦うべきは敵――敵とは何だ？

それは味方でないもの。

味方とは何だ？

有益である存在。友好的である存在。愛おしく思える存在。

そんな存在が自分にどれだけいるだろう。味方でないものを敵とするのなら、この世界にはカナコの敵が多すぎる。

それは理不尽なほどに。

「――」
カナコの一撃が通り、四つの腕が宙に舞った。

鉋^{ハサミ}を備えた二本の副腕と、か細い少女の両腕が斬り飛ばされ、空中でぐるぐると勢いよく回る。副腕の断面からは機械然とした内部構造が覗^{のぞ}き、本来の腕からは血液を撒き散らす。空気の澄んだ夜空に四本の腕が舞い、機械の破片と人間の血液と他にもよく判らないものが躍^{おど}っている。

カナコはその光景を一瞥^{ひとみ}すらせずカタナを振る。

すべての腕を失い、更に両足を切断され悲鳴のような金切り声を上げるキリエの喉^{のど}に、カナコはただ『うるさいな』と感じ、カタナの先端を突き刺し黙らせる。柔らかそうな部位が意外に固いのは、切っ先が首の骨に達しているからだろう。

「かひい……こふう……」

言葉にならない、空気が抜けるような音を漏らしながら、四肢を失ったキリエはそれでも這^はいつくばって向かってくる。痛みを感じていないのか、その表情は奇妙^{めづ}に緩んだまま、状況を理解していないとすら思える。

「――」
カナコは無造作にカタナを振り、キリエの背中の赤い羽根を付け根から斬り飛ばす。幼い子供が、無自覚な残酷さで虫の羽根を千切^{ちぎ}るように。

すでに痛覚が麻痺しているのか、それとも羽根に神経は通っていないのか、キリエは反応らしい反応を示さない。右肩を踏みつけ、額^{ひたい}から伸びる板^{プレート}状の鶏冠^{とじさか}を挽^もぎ取っても同じだ。

次はどうしよう。とりあえず目は潰^{つぶ}しておくべきか。もう耳も聞こえなくていいだろう。それで一切の出力も入力も出来ず、動く事すらままならない、生きた肉塊の完成だ。

カナコは機械的に思いついた事を実行に移す。異形と化して『ないはずのものがあった』キリエが、今は『あるはずのものがない』。

「――」
目の前に転がっている、かつてキリエ・ソウマだったなにかを、無感情に見下ろす。

報むくいは受けさせた。これであの二人も浮かばれるだろう。

『あの二人』って誰だっけ……』

ふと、本来は白と黒のMBジャケットが、返り血で赤く染まっている事に気付く。自分を染めた鮮血が誰のものだったか、それすらももう、思い出せない。

「今夜は月が綺麗ね……」

夜空に並んで浮かぶ二つの紅あかい月を見上げ、カナコは恍惚こうこつと眩くらいた。

第三十三話

『アコム』

カナコ・シングウジと、もはや〈機獣少女〉とは呼べない異形と化したキリエ・ソウマの戦いを、遠目に見守る者がいた。

槌矛メイス使いのモカだ。動く事すらままならない傷を負い、荒廃した街に取り残された姿は、より痛々しく感じられる。それが十二歳の年端としはもいかぬ少女なら尚更なおさらに。

(すごい——)

しかし彼女は、自分が置かれた状況なげに嘆いたりはしていなかった。それ以上に、自分を救ってくれた少女——カナコの戦いに魅せられていた。東方大陸の人間にとつて、カタナは馴染みのある武器と言える。だがそれは、いわゆる娯楽作品エンターテインメントの中の話だ。アイドルとしての側面を期待される〈機獣少女〉が持つには生々しいというか、武器然とし過ぎているため、使う者は珍しいのである。

(それに綺麗……)

武器とは究極的には人を殺す事に特化した道具で、戦いとは命の奪い合いに他ならない。だがカナコのカタナを振るう姿は、確かに綺麗だった。速く、無駄がなく、洗練された動きは、まるで一種の『舞い』のようにモカの瞳には映っていた。

しかし——

(……え?)

カナコの猛攻がぴたりと止まった。

横薙なぎによるカタナの一閃で、鉞ハサミを備えたキリエの副腕を斬り飛ばした直後の事だ。表情までは判らないが、棒立ちしている様子は放心状態のように見える。戦場で、しかも敵を目の前にして、それは自殺行為でしかない。

(……っ!?)

今のキリエは明らかに常軌を逸している。無防備なカナコの様子を警戒するより、好機と判断したのか、本来の腕で本来の得物えもの——馬上槍ランスタイプのMBデバイス〈オーディン〉を彼女の顔面に向けて突き出した。

「——しつかりなさい！ カナコ・シングウジ……ッ!!」

「——っ!？」

切羽詰せっぱつまった、しかし力強い声に、カナコは意識を呼び戻された。

視界には鮮烈な『紅』あか。それはルイゼ・ルンシュテッドの緩く波打つ長い髪。カナコに背を向け、相対するキリエの攻撃から護まもってくれているのだと状況を理解する。ルイゼのMBデバイス〈ジビー〉は左右二対の盾シールドで、それを二枚交差させてキリエのMBデ

バイス〈オーデイン〉を受け止めていた。

(……どういふ事？ 私は副腕と同時にソウマの両腕も斬り飛ばしたはず……)

しかし、キリエの両腕は健在だ。実際、こうして大型の馬上槍ランスを握っている。両脚もある。喉のども目も耳も潰つぶされていないし、異形の羽根と鶏冠とさかもある。

(なら、私が見た光景は妄想……?)

でなければ未来視か、あるいは平行世界の可能性のひとつが、混線するような形で見えてしまったのか。

(なによそれ……まるで危ない電波女じゃない)

兎とにも角かくにも、この状況はまずい。カナコは自身の得物えものであるカタナ——MBデバイス〈スサノオ〉を鞘さやに納めるような姿勢を取り、集中する。機力を物質化させ、飛び道具のように投擲しゅうてきするのだ。空中に現れる七本のカタナ。それらは自分の意思であるかのように、キリエに向かって牙を剥むいた。

咄嗟とつさに退さがって〈オーデイン〉を盾にするキリエ。カナコの意図を理解し、ルイゼは同じタイミングでキリエとは逆方向に跳躍ジャンプ。

「——滅アニヒレートせよ」

置き土産みやげよろしく、機力で作られたカタナを威力へと転化。〈オーデイン〉に突き刺さったそれらが一斉に小規模な爆発を起こした。

その隙すきに二人は手近な物陰に身を隠す。幸い、彼女等からはキリエの姿が丸見えだ。

「……助かったわ」

カナコが言うと、ルイゼは此方こちらを一瞥いちべつし、先の醜態しゅうたいについては何も言わないでくれた。

「どういたしました。状況が状況ですので、二つだけ確認させてください」

「なに？」

「アイナは無事ですか？」

この作戦は全員がペアを組んでいる。カナコの相手であるアイナの姿が見えなければ、ルイゼとしては気にするのも当然だ。

「ええ。命に別状はないわ」

「そうですか……」

ほっと胸を撫なで下ろすルイゼ。二人は親友——それ以上の関係という噂も聞く——らしいので、もっと正確な情報を知りたいはずなのだが、公私混同をしたくないのだろう。あるいは、この作戦の危険度を考えれば、生きていだけで充分なのかもしれない。

「もうひとつ。あれは——キリエ・ソウマさん本人で間違いありませんか？」

ルイゼの桃色の瞳が、異形と化した〈機獣少女〉を見つめる。

「……でしょうね。あんな馬鹿が何人もいたら堪らないわ」

言葉を交わしてみても、あれが偽物の類でない事は確信が持てる。キリエは同じ学校に通う同級生で、顔を合わせれば一方的に絡まれる程度には交流があるため、ある程度度の為人は知っている。

「ただ、洗脳なり、思考を操作されてる可能性はあるわね」

普段から残念な言動が目立つが、それでも今のキリエの状態は異常と言っている。彼女を庇うつもりは更々ないが、異形と化した姿を見れば、精神にも何かしらの影響を受けていると見るべきだろう。

「元に戻せる可能性はあると？」

「元に戻すくらいなら、このまま死なせてやった方が世のためだと思うけど」

「えーっと……」

「冗談よ。半分……いえ、三分の一くらいは」

それはつまり、三分の二は本気という事になるが、ルイゼはあえて指摘してこなかった。

「けど、どうやって元に戻すの？〈ステインガー〉がどうなったか判らない以上、時間をかけてる余裕はないわ」

やみひめとツバキ以外のペアの仕事は陽動だ。散っている〈ステインガー〉の幼体群を足止めし、二人の元に行かせない。そして可能であれば、担当場所の幼体群を殲滅し、他。ペアの援護に回るのが理想ではある。なにせ戦力はギリギリなのだから。

「だから彼女を見捨てると？」

「人の命は星より重い——とでも言いたいなの？」

ルイゼの言い分を綺麗事と一蹴するつもりはないが、この状況でそんな余裕もない。

「殺さないように戦って倒せる相手じゃないわ。私とあなたでもね」

「では、あと三人いればどうです？」

含みのある言い方に、カナコはルイゼという少女を見誤っていたと気付いた。彼女は無責任に綺麗事を吐く理想論者ではない。どうすれば目的を達成出来るか、知恵を絞った上で実行に移すタイプだ。

「はあ……。いいわ、付き合っただけあげる」

「カナコさんが察しの良い方で助かりましたわ」

嘆息するカナコを尻目に、ルイゼは優雅な笑みを浮かべて物陰から路上に出ると、いつの間にか手にしていた拳銃を、頭上に向けて発射した。作戦開始の際に使われなかった、黄色の信号弾である。

「……?!」

突然、夜空に黄色の閃光が瞬き、キリエが戸惑う様子が見えた。

続けて銃声。二方向からの銃撃が、キリエの異形と化した部位に撃ち込まれていく。威力は高いとは言えないが、正確に撃ち込まれ続ける射撃は、確実にダメージを相手に蓄積していく。

堪らずキリエは〈ステインガー〉のそれに酷似した尻尾を掲げ、その先端にある砲身を発射態勢に移す。発射されるのは恐らく荷電粒子砲。銃撃している相手が見えないなら、手当たり次第に薙ぎ払うつもりなのだろう。

だが――

「ぎい……ッ!?」

荷電粒子砲の発射を待たず、それそのものが砲撃のための根幹機構であろう尻尾が、半ばから切断された。二方向からの銃撃に気を取られ、ただでさえ死角である頭上からの奇襲に気付けなかったのだろう。

着地と同時にキリエの尻尾を切断したのはクラウド・P・ブラン。流遠やみひめ達と共に、惑星・地球から来た少女である。戦いとは無縁の生活を送っていたはずが、紆余曲折を経て〈機獣少女〉となり、この危険度の高い作戦に参加してくれている。ちなみにカナコと同年代――高校生くらい――に見えるが、実際はやみひめと同じ小学六年生らしい。

クラウドは即座に離脱、ホバリングで滑るように後退する。闇に溶け込む黒いドレスとは対照的に、獣の爪を思わせる右の手甲からは光る剣が生成されており、車両の尾灯のような黄色い光の尾を引いている。キリエの尻尾を切断した武装だ。夜間戦闘では目立つ事この上ないが、敵の目を引くにはうってつけと言える。

案の定、キリエは光に誘われるようにクラウドを追撃しようとするが――

「おおおッ！」

「――は！」

キリエの左右から迫る裂帛の気合。右からは真紅の刀身。左からは水色の槍先。
〈FA・Gエンタテインメント〉のライカ・ユズキと、同じくバニラ・イカルガだ。二人とも今は銃でなく、それぞれカタナと槍に得物を持ち換えている。多彩な武装を使いこなす技術は通常の〈機獣少女〉には必要ないが、戦闘そのものを興行として提供する彼女等の事務所では必須とされている。

斬った相手の鮮血に染まったかのような、ライカの専用刀〈ヒエン〉。穂の部分が大形で

クリスタル
水晶のような透明度を誇る、バニラの斧槍（ヘルランス）。その二つの同時攻撃を、しかしキリエは同時に受け取っていた。

バニラの（ベリルランス）は右手の（オーデイン）で。

ライカの（ヒエン）は、驚く事に刀身を左手で掴まれていた。

「こいつは驚いた！」

言葉とは裏腹に——いや、言葉通りなのか、ライカの驚きは称賛でもあった。観る人間を魅了するだけでなく、意表を突くのも興行には大事な要素である。

「よつと」

左手で背中に懸架していた専用ライフル（コクウ）抜き、至近距離からキリエの顔面を照準。怯んだ隙に（ヒエン）を掴んでいた右手を蹴り上げ、拘束から脱するライカ。同時に反対側のバニラも離脱し、入れ替わるようにクラウが突撃。両腕の手甲の爪は先から赤い光が伸びており、指から赤い爪が生えているようにも見える。

「——ッ！」

赤い光で範囲が伸びた左右の爪を、交互に繰り出す激しい連撃。ライカはその戦い方を見て、クラウを（F.A.:Gエンタテインメント）にスカウトしたくなった。装備の見た目的にもぴったりののだ。

「があああ——ッ！」

（オーデイン）を大振りしてクラウを振り払うキリエ。クラウは即座に後退し、今度はバニラが突撃する。彼女は銃の扱いに長けているが、近接戦闘が不得意な訳ではない。

「——は！」

短く息を吐き、斧槍（ヘルバード）の穂を突き出すバニラ。それをキリエは馬上槍（オーデイン）で迎撃する。奇しくも槍対決となったが、その大きさ自体を武器に突撃する事を得意とする（オーデイン）は、大型ながら変幻自在の攻めを可能とする（ベリルランス）と相性が悪く、防戦一方となっている。

すかさず、ガラ空きとなった背中にライカが切り込む。狙うは赤く輝いている刃物のような羽根。どんな機能があるのか知らないが、不確定要素は早めに取り除くに限る。

しかし——

「な……っ?!」

ライカの一閃は羽根を切断せず、（ヒエン）の刃は、展開されたそれに受け止められていた。（ヒエン）は金属とも水晶とも言える特殊な素材で作られており、彼女の剣技と合わせれば理論上、斬れない物質はないとされている。それが今、鏝迫り合いとなり、火花を散らしている。

（この羽根、リーオ以上の硬度なのか……？）

東方大陸で産出される希少金属——それが『リーオ』である。惑星ゼーナでもっとも高い硬度を持ち、カナコのカタナ（スサノオ）もリーオ製だと聞いている。ライカは過去に、パフォーマンを兼ねた試し斬りで、加工していないリーオの切断に成功していた。

（これは羽根なんかじゃないし、虚仮威しでもない。完全に凶器だ……！）

ライカは離脱し、突入ポイントの変更を考える。あの羽根は危険だ。それは今の一撃で他のメンバーにも伝わっただろう。

「——つと」

キリエの両腕に新たな武器が増えていた。右腕には二連装キャノン。左腕には切り詰めた砲身のガトリング。それらを斉射し、周囲に機力の銃弾をバラ撒き始めた。

カナコがキリエに一騎打ちを挑んでいる時、ルイゼはライカとバナラ、そしてクラウドと再合流し、予め打ち合わせを済ませ、信号弾の合図で攻撃を開始する手筈を整えていたらしい。

「用意周到ね……っ」

「そういう事ですわー！」

カナコとルイゼが攻撃に加わる。両腕のシールドを正面に展開し、一気に突き進むルイゼ。彼女の後ろにつき、カナコは機力で編んだ四本のカタナを投擲。キリエの左右のキャノンとガトリングに向かい、二本ずつ向かっていく。一本は直撃してガトリングを破壊したが、残りは迎撃。だが、第二射の必要はなかった。

更に投擲されたのはバナラの斧槍（ヘリルランス）。それは二連装キャノンの砲身の間を貫通し、穂先は地面に深く突き刺さり、キリエをその場に縫い付ける役目も果たした。

「好機ですよー！」

両腕のシールドからカニバサミ状の刃を展開し、ルイゼが咆える。

「ええー！」

呼応し、カナコは右へ、ルイゼは左へと別れ、その間を抜けてクラウドがキリエの正面に向かう。一斉攻撃だ。後方を担当するのは当然、ライカとバナラ。バナラは（ヘリルランス）を投擲して失っているが、その両手には刀身が水色の輝きを放つ剣が握られている。なるほど、武器が多いと便利だ。カナコは内心で嘆息した。

これでキリエは左右と正面、後方も塞がれた形となる。どうしたって二本の腕ですべての攻撃を捌ききる事は出来ない。

しかし――

「く……ッ!？」

その驚愕の声は誰が発したものであったか。少なくとも、キリエを除く全員の心情ではあつただろう。

キリエは五人のほぼ同時攻撃を、すべて受け止めていた――五本の腕で。

正面からのクラウの攻撃は、左手で握る〈オーデイン〉で。左右からのカナコとルイゼのそれは、瞬時に再生させた鉄ハサミを備えた両の副腕で。背後からのライカとバナラに至っては、尻尾しっぽの付け根の左右から新たに発生させた、やはり鉄を備えた小型の副腕で迎撃されていた。

「くひっ……きひひひ……」

ありえない状況に誰もが絶句する中、キリエが奇妙な哄笑こうしょうを上げる。すると、青と赤に変化したドレスアーマーの装甲の隙間すきまから、ぼんやりと青白い光が浮かんでくるのが見えた。

「散開……ッ!」

誰もがヤバいと感じ、しかし動けずにいたところへ、ルイゼの指示が飛ぶ。それを受けてそれぞれに離脱する四人。

「ルンシュテッドさん!？」

「何やってんだ〈竜帝〉!」

離脱しながらバナラとライカが叫ぶ。ルイゼだけがその場に留まっているのだ。見れば、彼女は左腕のシールドを、再生した副腕に掴つかまれたままだった。

「っ! 助けるから!」

上空に離脱したクラウが、急降下に転じる。

「来ないで!」

だが、ルイゼはそれを制した。何をするつもりか知らないが、知らないからこそキリエの状態は危険だと感じる。少しでも距離を取るべきだし、クラウを巻き添えにしたくない。

「〈ジービー〉、強制排除を!」

『了解。左腕部シールド、強制排除』

ルイゼの両腕に装備された盾シールドタイプタイプのMBデバイス〈ジービー〉が、主の指示を実行する。戦闘中に手放してしまわないよう、シールドは腕の接続部アタッチメントを介して保持されており、戦場で外すには強制排除するしかない。

アタッチメント
接続部に内蔵された炸薬によってシールドが切り離されると、ルイゼは背中
スラスター
推進器をフル稼働させてホバー走行に移行する——が、離脱するには遅かった。

「<……っ」

直後、彼女の視界は青白い閃光に包まれた。



少女が目覚めると、並んで浮かぶ二つの紅い月が目に入った。此処は夜空の下で、どうやらベッドの上ではないらしい。布らしきものは敷かれているが、固く、寝心地は悪い。

『——気が付いたね。どうだい、お目覚めの気分は？』

ミステリアスで中性的な優しい声音こわね。この声を少女は知っている。普段は言葉を発せず、人間の姿すらしていないが、共に戦い、寄り添ってくれた相棒パートナーの声だ。

「……………」

だが、今の少女は眠かった。返事をするのも億劫おっくうだったので、瞼まぶたを閉じて、声の聞こえた方向に背を向けた。

『おいおい。無視して二度寝は勘弁してほしいな』

「……眠い」

『ならせてベッドまでがんばろう。ふかふかな方が気持ち良く眠れると思うよ？』
「……………」

仕方なく、のろのろと起き上がる。彼の言葉に納得した訳ではない。無駄に抵抗するくらいなら、従った方が結果的に楽だと判断したに過ぎない。

『おはよう、カグヤ。ご覧の通り、もう夜だけだね』

「……おはよう、〈シラヒメ〉」

目覚めの挨拶あいさつをされた少女——カグヤは、当然のように挨拶を返す。しかしすぐに違和感を覚えたのか、声の主を探す。

『どうしたんだい？』

「……………」

自分を気遣きづかう声と思わぬ場所から聞こえ、それを左腕に下がっているペンダントが発しているのだと気付き、カグヤは暫ししば黙考する。

『……カグヤ、考えるふりをして本当は何も考えていないだろうか？』

「……………」

正確には考えるつもりはあった。だが、すぐに考えるだけ無駄だと悟ったのだ。

「……何処？ どうなったの？」

戦っていた。どうしていいか判らなくて。

決着はついた。自分達の負けで。

それから光の柱が見えて、それから――

思い出せない。

『此処は惑星ゼヘナ。どうやら僕達はあの戦いの後、この世界に転移してしまったらしい』
逆十字の形をした白銀のペンダント――〈シラヒメ〉は、まことしやかに語った。

「……〈シラヒメ〉、大丈夫？」

きつと疲れているのだろう。もしくは、重大な異常が発生しているのかもしれない。

『えー……まさか君にそんな反応リアクションをされるとは思わなかったよ。複雑といふかなんと
いうか――若干、イラツとするね』

「……？」

なぜだろう。微妙に馬鹿にされた気がする。

「さて、真面目な話をしよう――カグヤ、本当はなんとなくでも状況は理解出来ているんじゃないのかい？」

普段と同じ穏やかな声音で、今はペンダントの姿をしている相棒パートナーは言った。

「……………」

言われてみれば、そんな気もする。口では〈シラヒメ〉の正気を疑うような事を言ったが、本気でそう思った訳ではない。むしろ、彼が言うならそうなのだろうと受け入れている。実際、此処は元いた世界に似ているが、微妙に違う気がする。ならば〈シラヒメ〉の言った通りなのだろう。

「……うん。でも、どうして〈シラヒメ〉はあたしの知らない事を知ってるの？」

『ああ、彼女等に聞いたのさ。こちらの可愛らしいお嬢さん達にね』

そこで初めて、その場にいるのが自分達だけでない事に気付いた。子供、しかもまだ小学生くらいに見える女の子が二人。こんな時間、こんな場所に、保護者もなしに出歩いても問題ない世界なのだろうか、カグヤはほんやりとだが思った。

「そういう振られ方をすると自己紹介しづらいですね……」

『事実を言ったままだよ。もっと自信を持つといい』

「あはは……」

〈シラヒメ〉の言葉に苦笑を浮かべたのは、セミロングの黒髪を左側でサイドポニーにした少女の方だ。口調が丁寧な事も相まって、年齢の割りに大人びた雰囲気を感じさせる。
「ツバキって、ひよっとして〈シラヒメ〉みたいなのがタイプ？」

「なんです、急に……」

「だって、〈シラヒメ〉に何か言われる度に赤くなってるよ。」

「なってますよ」

「えー、本当にー？」

「本当です」

ツバキと呼ばれた大人びた方の少女を、もう一人が面白そうにからかう。ツバキと同じ黒髪だが、彼女は長いそれをポニーテールにしている。ツバキと比べて見た目も性格も年齢相応といった雰囲気だ。

だが、それ以前に――

「……〈キョウシュウキ〉？ 縮んだ？」

カグヤはポニーテールの少女に見覚えがあった。顔を合わせたのはたった一度。それでも強烈な存在感は忘れようがない。

『カグヤ、残念だがそのくだりはもうやったんだよね』

「……どういう事？」

『彼女は僕達の知っている〈キョウシュウキ〉とは別人だって事だよ』

〈カグツチ〉曰く、ポニーテールの少女の名前は流遠るとおやみひめ。自分達と同じように、このゼヘナという星に転移してきたらしい。〈機獣少女〉と呼ばれる戦う存在で、それはツバキも同様だそうだ。道理で二人とも武器のような物を持ち、私服にしてはおかしな格好をしていると思った。もっとも、格好に関しては私服がゴシックロータのカグヤに言えた義理ではないのだが。

「……そう」

まるで記憶がないが、カグヤは自身も〈機獣少女〉となり、やみひめとツバキを攻撃したらしい。その戦闘中、〈シラヒメ〉の呼びかけがやみひめに届いた事で、カグヤは今こうして意識を取り戻せたのだと。

『改めて礼を言うよ。ほら、カグヤからも』

「……ありがとう。憶えてないけど」

『すまない、彼女は照れ屋だね。ぼんやりしてるけど良い子だから、仲良くしてやってくれと嬉しい』

「……カグヤ・イザヨイ。よろしく」

自己紹介をしろと〈シラヒメ〉に言われたが、名前くらいしか憶えていない。年齢すら出てこない――というか、自分自身に何か違和感がある気がする。今の自分は、本当に本来の自分なのか？ 無論、哲学的な問いではない。

「よろしくね」

「こちらこそ。ところで、イザヨイさんはなぜ、〈ステインガー〉の中にいたんですか？」
無邪気に照れ笑いを浮かべるやみひめとは対照的に、ツバキは物腰は穏やかなまま、核心に触れてくる。敵意はないが、まだ警戒はしているといった感じだ。

〈シラヒメ〉と二人の話を聞く限り、カグヤはあのデカブツ——〈ステインガー〉と呼ばれる全長約百メートルほどの蠍サソリの頭部から出てきたらしい。今やその巨体は完全に地に伏し、機能は停止している。重力制御装置を破壊され、自重で潰れたのだという。実際に動いている姿を見ていなくとも、あの巨体が自重を気にせず動く脅威は想像に難くない。むしろ、それをたった二人、しかも年端としはもいかない少女達が倒したという方が想像しづらい。

〈機獣少女〉とは、それほどまでの力をもっているのか。それとも、この二人が特別なだろうか。

「……よく覚えてない。頼まれて、何かの壁を壊して、それだけ」

ついさつき目覚めるまでの事でカグヤが憶えているのは、それですべてだった。ちなみに〈シラヒメ〉が意識を取り戻したのは、カグヤが〈ステインガー〉から出た直後くらいだそうだ。

「誰に頼まれたんですか？」

「……判らない」

頼まれたというのもイメージでしかない。口頭だったのか、文章だったのか、あるいは一種の精神感応テレパシーのようなものだったかもしれないのだ。

「何かの壁って、ひよっとして封印施設の事かな？」

「タイミングから考えて、可能性は高いでしょうね」

『横からすまない。何の話かな？』

二人の話を要約するとこうだ。〈ステインガー〉は封印されていたが、その封印を解いた存在がいる。だが、この星の人間にとってそれは禁忌タブーであり、人為的なものであるなら、その者はゼーナ以外の星から来た可能性が高い。

『なるほど。状況証拠で言えば、その施設を破壊した犯人はカグヤで間違いないだろうね』

「……………」

『だが、君達と戦った時のカグヤは、何らかの命令を受けて戦わされていた節がある』

「それには同意します」

「うん。意識はなかったんだしね」

「……………」

『つまり、施設の破壊も君の意思じゃない。やらされていた可能性が高い。実際、カグヤは自分の意思で、その何かの壁を壊したのかい？』

「……憶えてない」

壊した記憶はあるが、自分の意思で能動的に行った憶えはない。

「判りました。とりあえず、イザヨイさんと〈シラヒメ〉さんについては、何者かに利用された被害者として扱います。それで構いませんか？」

「ああ。カグヤを悪者にしないでくれるなら、それで充分だよ。ありがとう——ツバキ」

「ひゃう……!?!」

本人にそんなつもりがあるかは判らないが、〈シラヒメ〉に甘い言葉を囁かれたツバキは、顔だけでなく耳まで赤くなっている。

『それと、僕の事は呼び捨てで構わないんだよ？』

『——〈シラヒメ〉よ、即刻その軽薄な口を閉じるがよい。ツバキの純情を弄びおっつ』

〈シラヒメ〉と同様の、拡声器を通したような別の機械音声^{マシン・ヴォイス}が会話に加わった。女声で、古風な口調である。

『いやだな。そんなつもりはないよ』

『無意識か、このスケコマシが！ 貴様は今後、私を介さずツバキに話しかける事を禁するー！』

『スケコマシって……此方ではどうか知らないけど、今日日聞かないね』

『話をすり替えるでない』

「ツバキ、『すけこまし』ってどういう意味？」

「たしか、女たらしとか、そういう意味だったと思います」

「チャラ男だ！」

『あはは。ひどい言われようだなあ』

初めて聞く声に、カグヤはぼんやりとした表情のまま首を傾げた。

「……誰？」

「あ、私のMBデバイスの〈カグツチ〉です。普通のMBデバイスはこんな風にはしゃべらないんですが、彼女は特別で」

ツバキは手にしていた機械的な意匠の雑刀^{メカニカルデザイン}を掲げ、カグヤに説明してくれた。『彼女』という表現に、ツバキがそれをただの道具とは見ていないのが窺える。

「……『カグツチ』——」

不思議と聞いた事のある響きだと感じた。同時に違和感も覚えた。それが彼女の本当の

名前ではないかのような……。

（——カグヤ。その違和感には触れないでおこう。どうもデリケートな事情があるらしいからね）

（シラヒメ）？ ……そう、ならそうする）

不思議だ。この直接心で会話する念話というコミュニケーション手段も、〈シラヒメ〉の言っている事も、自然と受け入れられる。自分の〈機獣少女〉としての能力や使い方も同じだ。恐らく、すぐにでも使いこなせる。まるで、意識がない間に睡眠学習でも施されたかのようだ。

だが、その機会はないだろう。この星は大変な状況に置かれているそうだが、最大の懸念事項であるらしい〈ステインガー〉は殲滅したのだから、わざわざ身元の怪しいカグヤを戦わせる理由がない。

「……………」

ならどうして、自分はこの世界に来たのだろう。〈ステインガー〉の封印を解かせるためだけに呼ばれたのだろうか。

ふと寂しい気持ちになる。こういう時、すぐ近くにいてくれた誰かが、いつも優しく手を握ってくれていた気がする。蠱惑的に笑う、紅い髪の——

思い出せない。

落ち着かない。

（あたし、誰を忘れちゃったんだろう……）

弱々しく開いた自分の右手を、カグヤはぼんやり眺めた。

意識を取り戻したカグヤ・イザヨイに対し、やみひめは誰かに似ているとずっと感じて

いた。それはアサトだ。

たちほな

橘 アサト。

ごく平凡な高校三年生の少年。やみひめの想い人。

あまりに身近すぎて気付くのに時間がかかったが、カグヤはアサトに似ている。年齢は同じくらいだが性別が違うし、容姿は似ていない。雰囲気というか、本質的な何かが似ていると感じさせるのかもしれない。

（あ……）

ふと、カグヤの表情が陰った気がした。何か思うところでもあるのか、自分の右手をぼんやりと眺めている。それを見て、やみひめは堪らない気持ちになり、思わず彼女の右隣

に並んで手を握っていた。

「……え？」

ぼんやりとした表情はそのままだが、心なしか戸惑いが見える。当然だろう。カグヤにしてみれば、出会ったばかりの相手に、同性とはいえ急に手を握られたのだ。

「こうしてほしいのかなって。えっと、違ったら、ごめん……」

「……………」

『なんだこいつ』と思われるでも仕方ない。だが、カグヤは無言のまま、握られた手を握り返してくれた。

「……こんな風に、誰かに手を握ってもらった。嬉しかった」

カグヤはやみひめから視線を外し、少し俯きがちに正面を見つめた。元々ぼんやりしている上、やみひめの位置だと右目が眼帯で隠れて見えないため、表情はよく判らない。

「……それなのに、あたし、その人の顔も名前も思い出せない」

「そうなんだ……」

もし自分がそうだったら。その相手がアサトだったら。そう思うと、やみひめはより堪らない気持ちになった。

「シラヒメくさんは、その方についてご存じないんですか？」

『……知ってる。僕の名前を付けたのも、そいつだからね。けど、僕もカグヤと同じだ。』

断片的な事しか思い出せない』

忘れたというより、記憶に鍵をかけられたような印象らしい。扉の向こう側に答えがあるのに、開ける術がない。彼等にしてみればもどかしい限りだろう。

しんみりとした空気が流れる中――

夜空を切り裂くような青白い閃光が頭上を奔った。

全員が光の出所を探り、一点に視線が集中する。

「行きましょう。ゆつくりしすぎたかもしれません」

「うん。まだ、みんな戦ってるんだもんね」

今作戦の最大にして絶対の達成条件である（ステインガー）の殲滅を果たしたという安心感もあるが、やみひめとツバキを相手に一人で戦えるような正体不明の少女を、放置しておく訳にもいかなかった。

とはいえ、自分達以外のメンバーはまだ（ステインガー）の幼体群と戦っているはずなのだ。加勢に行くなら早いに越した事はない。それに先ほどの閃光、あんな攻撃手段を幼

体が使うのは見た事がない。嫌な予感がする。

「イザヨイさん達も、ご同行願います。状況によっては手伝っていただけると助かります」

「……判った」

スターティング・ヴォイス
起 動 言 語 を 唱 え、カグヤの衣装がMBジャケットに変わる。と言っても、基本となるゴシックコロリータは黒から白に色が変わったただけだが。

「……あと、カグヤでいい」

「では、私もツバキと呼んでください」

「私も、やみひめでいいよ!」

「……判った」

MBジャケットを纏っても、カグヤの表情はぼんやりとしたまま変わらない。その実力は身をもつて知っているが、少し不安に感じるやみひめだった。

「……?」

不意に気配のようなものを感じた。視線かもしれない。なにかがいて、自分達を見ている。そんな感覚。

「やみひめさん?」

「……行かないの?」

正体不明の気配を感じているのは、やみひめだけらしい。ツバキは不思議そうに、カグヤはぼんやりした表情のまま、此方を見ている。

『……〈カグツチ〉、君は何か感じないか?』

『気安いぞ——などと言っている場合ではないな。恐らく貴様と同じものを、私も感じている』

「! 二人は判るの!?!」

意外にも、MBデバイスの〈シラヒメ〉と〈カグツチ〉も、やみひめと同じものを感じているらしい。

『やみひめ、其方はこの気配に気付くか……ふっ、本当に不思議な娘よ』

気丈に振舞っているが、〈カグツチ〉の言葉からは緊張感が滲み出ている。時には微笑ましかったり、可愛らしかったりもするが、基本的には凛として強い彼女を緊張させるこの気配はなんだというのか……。



キリエのMBジャケットであるドレスアーマー。それを構成する装甲と装甲の隙間から

四方どころか、ほぼ全方位に青白い閃光が奔った。

上空に離脱したクラウは、その場の誰よりも正確にその光景を目撃した。あれは恐らく、クラウやルイゼ、そして〈ステインガー〉が装備しているのと同じ荷電粒子砲だ。空気中の静電気を取り込み、エネルギーに変換し、更に増幅させて撃ち出す兵器。それをキリエは、砲身で集束させず、直で全方位に拡散照射したのだろう。回避はほぼ不可能。盾や装甲で防ぐか、さもなければクラウのように、死角である真上に移動するしかない。

「……………」

クラウは絶望的な気持ちで低空を遊弋する。大量に巻き上げられた塵や砂埃で視界が悪い。他のメンバーはどうなった？ 離脱が遅れたルイゼは……？

「……？」

地上でぼんやりと光が灯った。青白い光だ。それはとても見覚えがあつて――

「——っ!？」

考えるよりも先に身体が動いた。ヤバい。とにかく動け。本能に急かされ、自動制御装置を無視して出鱈目に加速した。

直後に奔った青白い閃光。荷電粒子砲だ。幸いにも直撃は免れたが、余波によって推進システムがダメージを受けたらしく、ゆっくりと高度が落ちていく。

「くっ……」

失速しないよう姿勢を制御しながら着地を試みるクラウは、地上から此方を見上げるキリエの姿を見つけた。

(副腕だけじゃない。尻尾も再生してる……)

荷電粒子砲の発射前にクラウが切断したはずの、砲身と多関節を有した平たい尻尾。先の一撃はそれによるものだろう。

「ひっ!？」

目が合った。キリエは歪んだ笑みを浮かべ、その瞳は明らかに正気を失っていた。

ゆっくりと降下していくクラウを視界の端に入れつつ、ルイゼは自分の状態を確認する。咄嗟に残った右のシールドを地面に突き立て、収納されているカニバサミ――一对の刃を展開し、その場に固定。正面面積を最小限にして身を隠し、キリエの放った攻撃を凌いだまでは良かったが、消耗が激しい。

加えて、彼女のMBデバイスである〈ジービー〉は特殊で、デバイス形態になる際、二つのシールドにそれぞれMBコアが分裂して納められる。これには、二つになったMBコ

アの共鳴作用による出力向上という利点があるが、どちらかを失った際には出力が激減してしまう欠点もある。今がその状態だ。

(模擬戦ならまだしも、まさか実戦でこの状況を迎える事になるとは……)

〔機獣少女〕の敵は〈カタストロ〉であり、かつてこのような状況に陥る事は、まずありえなかった。

「無様ねえ……りゅ、〈竜帝〉……くくっ……くけけっ」

ゆつくりと、時折ふらつきながら、幽鬼のような足取りで此方に向かって歩いてくる

——異形の少女。赤く輝く羽根。板のような鶏冠。背後から生えた、鋏を備えた大

小四つの副腕。平たい尻尾。

キリエ・ソウマと呼ばれた〈機獣少女〉のなれの果て。

奇妙な言動の理由は、言語機能に障害が起きているためだろう。〈機獣少女〉のMBジャケットの域を超えた姿は、確実にキリエの身体に負担を強いているはずで、普通ならば痛みで意識がもたないはず。そうならないのは、恐らく脳内物質の過剰分泌によるもの。身体^{からだ}の限界を誤魔化し、その代償として精神が破壊されていく。

鬼畜の所業だ。

「……………これがな……んだかわかわか……判るう……?」

彼女は右手に持っていたものを無造作に掲げ、ルイゼに見せつける。離脱の際に強制排除したシールドだ。

(挑発している?)

欲しければ取り戻してみろ——と。

だが、違った。

「あ〜ん……」

「——っ!?!」

キリエはルイゼのMBデバイス〈ジービー〉の片割れを——喰った。

「……………」

やや離れた場所からキリエの常軌を逸した行動を目の当たりにし、大抵の事には動じないカナコですらも言葉を失っていた。ルイゼのシールドを左右に割り、赤い宝石のような部品^{パーツ}を折り取り、繋がっていた導線^{チューブ}ごと飲み込んだのだ。

(アイナの時と同じだわ……)

カナコは同じ光景をすでに見た事があった。最初にキリエと相対した際、ペアであった

アイナ・ボーグマンのMBデバイス（ビィエル）を奪った彼女は、二人の目の前で（ビィエル）のMBコアを取り込んだ。こうして再び同じ光景を見せられても、未だに信じられない。

「……また、助けてもらいましたね」

背中に聞こえた声に、カナコははっと我に返った。呆けていられる状況ではない。首だけで振り返ると、其処には重傷を負った（機獣少女）の姿があった。槌矛使いのモカだ。隣には彼女の先輩であるリツの姿がある。息はあるようだが、この状況では手の施しようがない。

「偶々よ。運が良かったわね」

カナコの離脱した先が、偶然二人の倒れた場所だった。キリエの攻撃に対し、回避は不可能と判断して（ヤタノカガミ）を使い、結果的に背後の二人も護る事に成功した。使わなすぎて存在を忘れそうになる装備だが、ベアトリーチェが参加した模擬戦の時といい、今になってこうも出番があると少しは、ありがたみも出てくる。

「はい……」

カナコのぶつきらぼうとも言える言葉に、モカは弱々しく笑みを浮かべた。せめてMBジャケットを解除してやりたいところだが、この状態でそれをするとは即死に繋がる。（機獣少女）化によって身体強化が成され、不可視の防護膜は攻撃から身を護るだけでなく、それを維持する役目もある。その状態が解除されれば、肉体は受けたダメージに耐え切れない。

「なるべく浅く呼吸して、MBジャケットは絶対に維持すること。死にたくなければね」

「ありがとうございます……」

再び弱々しく笑うモカ。そんな余裕すらないはずなのに。

「……………」

正体の判らない苛立ちが沸々と湧き上がる。

それは優しい言葉のひとつもかけてやれない自分に対してか？ それとも、この状況をひっくり返すだけの力が自分にはない事にか？ ならばいい。

この状況を現在進行形で引き起こしているキリエの馬鹿さ加減に対してか？ それもまだいい。

最悪なのは、この苛立ちがモカに対するものであった場合だ。分不相応な実力で作戦に参加した身の程知らず。この状況でも律儀に他人に感謝し、へらへらと笑っているお人好し。そういうカナコにない部分、欠けている部分を見せつけられている、言わば劣等感による苛立ちなのだとしたら……。

「……？」

モカがきよとんとした表情でカナコを見ている。逆の立場であれば、カナコもそうしていたのだろうか。想像がつかない。

モカに背を向けたまま立ち上がる。

まずはキリエだ。クラウが撃ち落とされ、ルイゼが事実上の戦力外となった今、傷付けずに無力化するのは不可能となった。

ならばもう、止める手段はひとつしかない。

「終わらせてあげるわ、ソウマ——」

ぼつりと呟き、駆け出す。このままではルイゼが次の犠牲者となる。

キリエを救えるとしたら、あとはもう——

（——死とは救済か。なるほどのう……お主は正しい）

「——っ!？」

唐突に聞こえた——声。

だがそれは空気の振動で伝わったものではない。心に直接語りかけられたようだった。キリエを目の前にしながら、カナコの足が完全に止まる。

「じゃが、今は困る。預けたものを回収せねばならんのでな」

「……!？」

今度は肉声だ。しかもそれは、カナコのすぐ背後から聞こえた。

カナコの後ろにそれは——いる。

「ふむ。なかなか妾好みじゃのう、お主」

髪に触れられている。匂いを嗅がれている。ゾツとするのに、鳥肌すら立たない。

「なに、すぐに済む。少しばかり待つておれ」

振り向けない。

『それ』はカナコのすぐ隣を抜け、すたすたと歩いていく。

眼球すら動かせず、ようやくカナコの視界に入った『それ』は、人の形をしていた。

黒い髪。布の多い、ぞろっとした和服。その背中から受ける印象は女性だが、その気配は明らかに人間を逸脱している。

意識しなければ呼吸すら止まりそうになる威圧感……いや、存在感？ 適当な言葉が見つかからない。歩きにくいはずの衣装の裾を、まるで気にする風もなく、戦闘で荒れた悪路を『それ』は平然と進む。

「よう預かってくれたのう。感謝するぞ」

『それ』はギリエの眼前まで来ると、そう言つて無造作に彼女の胸元に――

「――っ!？」

己の右腕を突き入れた。

「……あ……ぎい……」

ギリエはされるがまま抵抗しない。時折ときおりびくりと身体からだを痙攣けいれんさせ、恍惚こうこつの眼差しまなざしを『それ』に向けている。彼女の背後では、ルイゼが愕然とその光景に見入っているのが判る。

異常な光景と、『それ』が放つ形容しがたい気配に、カナコの思考がループする。

あれはなんだ？

あれはなんだ？

あれは……なんだ？

つづく

あとがき

どうも、流遠亜沙です。

『機獣少女ジイカルやみひめ The NOVEL REVIVAL』第二十二話をお届け致します。

まずは掲載が遅れてしまい申し訳ありませんでした。生きる糧と言っても過言ではない『なのは Defonation』が公開され、『アニゴジ』最終章もあつたりと、気持ち的にバタバタしておりました（単純に体調不良や集中力散漫もありましたが……）。

本編についてはご覧いただいた通りです。まだ一波乱あります。これは予定通りの展開です。ただ、こんなはずじゃなかったんだけどなあ……という展開も出てきました。書いていて、自分でも考えていなかった台詞やシーンが増える事は多々ありますが、この展開は完全に予想外です。どれの事を言っているのかは次回以降のあとがきなりブログにて。

それでは謝辞を。

まずはチェックをしてくださっている紙白さんに感謝を。クラウ、バニラちゃん、そしてライカさんの連携がついに実現しました。彼女等は明らかに装備が通常の〈機獣少女〉とは別系統なので、書いていて楽しいし、自然と差別化も出来るので戦闘描写に困りません。

そして、ここまで読んでくださった『あなた』に感謝を。過去作品のキャラについては、判らない部分は読み流してください。『ジイやみ』を読む上では特に問題ありません。判らなくてストレスだ——という場合はお叱りのコメントを……お手柔らかに。

次回が年内最後の更新（予定）だ！

2018 / 11 / 24 流遠亜沙

アンケートに答える

『機獣少女ジイカルやみひめ The NOVEL XXXXXX 第2部』小説ページに戻る